

沢村貞子著「私の浅草」暮らしの手帖社 1996年10月4日刊を読む

南の島に雪が降る - 役者バカ・弟加東大介 -

1. 好きなことは？ときかれば、一に役者、二に役者、三にも役者と即座に答える役者バカ——加東大介は、こうして母と妻——二代の浅草女に守られて、まるで大きな子供のように、素直に無邪気に育っていった。まさに役者子供そのものだった。
好きな食物——アンパン、苺、まぐろのおすし。
2. 前進座にはいって、ようやく舞台に精魂打ちこんでいるとき、赤紙が来た。つれてゆかれた先のニューギニアで、思いがけず、演芸分隊長として芝居をすることが出来たことは、本当にしあわせだった。空襲と飢餓でつぎつぎ倒れてゆく戦友たちが、ジャングルに急造された「マノクワリ歌舞伎座」の芝居を見て、どんなに喜んでくれたか……加東は馬のしっぽで作ったかつらをかぶり、ブリキの三味線で踊りながら、役者としての喜びを、毎日、かみしめていたと思う。その顛末を「南の島に雪が降る」という本に書いている。
3. 後年、当時の演芸分隊員が私にささやいた。
「加東班長どのは、ふだんはまことにおとなしい、やさしい人でしたが、芝居の稽古のときだけは、こわかった。きびしかったですからねえ」
4. 運よく生きて帰ってからは、ますます身体を大切にした。
「なんてたって、身体が役者の資本だからね」
若いときから、酒ものまず、煙草も吸わず、賭ごと、情事、いっさい興味なし。贅沢を知らず、人に迷惑をかけず、いとしい妻と子のいる家庭だけをただ一つの憩いの場として、演技の工夫に明け暮れる……そんな、文部省推薦とでもいいたいような、生真面目な役者だった。
5. やつれた首すじをなでながら、りんごをする妻の後姿を、甘えた眼で追っていた。
「早く治って、いい芝居がしたいなあ。今度こそ、うまい役者になるぜ。いぶし銀みたいな渋い味のある役者にね……やっこの頃、なにかつかんだような気がするんだ……見ててくれよ姉さん……」
どんなにおそくも、来年は芝居が出来る——そう信じて疑わない弟の前で、明るく相槌をうつのは……辛かった。
6. 「役者は基礎が大切だよ。若い連中に今まで僕が習ってきたものを残しておきたいな。ニューギニアでさ、芋の葉っぱで命をつないでたズブの素人の兵隊をならべて毎日、発声練習を教えたもんだ。おかげで7000人の人たちをあれだけ喜ばす芝居が、どうにか出来たんだものね……」

7 . 栄養失調で瀕死の兵隊の耳許で、班長が明日はうちの部隊の観劇日だぞ、お前、見ないで死ぬつもりか、と怒鳴ったら、

「その兵隊、呼吸をふきかえしたって」

ポツリ、ポツリとその頃の話をする弟のやせた頬に赤味がさし、幸せそうだった。

8 . 演芸班の人气がたかまったころ、司令官が内地へ召還された。加東の芝居に感動していたその中将は、彼を栄転先きへ連れて行こうとした。生還のチャンスであった。しかし、弟はなやんだ末、それを辞退したという。

「あんなに喜んでくれる大事な見物をおいて、ぼく一人、帰れなかったんだよ」

結局、終戦まであしかけ4年、文字通り命をかけて、ジャングルで芝居をしていた。

9 . 復員後、長谷川伸先生をお訪ねして、作品の無断上演のお詫びをした。先生は、

「君は幸せな役者だ。そんなに喜んでもらえる舞台を踏んだ役者はめったにいないよ。芸とは、人をたのしませることだよ」

とおっしゃったそうなの。

「だから僕はもっとうまくなって、もっとみんなにたのしんでもらうよ、姉さん」

P239 ~ 242

[コメント]

浅草出身の女優沢村貞子さんのエッセイ。弟の俳優加東大介さんを偲ぶ文章は心温まる。

- 2009年10月27日 林明夫記 -